



新編歌仙句集

卷

八十番

14  
3157  
21(4止)



14  
3157  
21  
(4止)

越後國  
三島郡  
七日  
田山  
印

新穀熟後田集令之部

十月

秋無月

雲の如くもろくも

土佐 雲晴

小春

降雨乃て

二柳 鶴翅

いづれも

江戸 有時

小六月

思ひあへて

伊勢 徐行

其思



神送

桐人ハ帷子<sup>ト</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>月  
る<sup>ル</sup>阿<sup>ノ</sup>ま<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>朝<sup>ノ</sup>那  
草<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>人<sup>ノ</sup>目<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>送  
草<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>人<sup>ノ</sup>目<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>送  
本<sup>ノ</sup>が<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>送  
神<sup>ノ</sup>が<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>送  
神<sup>ノ</sup>が<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>送  
神<sup>ノ</sup>が<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>送  
神<sup>ノ</sup>が<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>送  
神<sup>ノ</sup>が<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>送  
神<sup>ノ</sup>が<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>送

木安  
古勢  
傘担  
市燕  
佐嘉  
古巢  
花胡  
其右  
住核  
智功

神留

冬一

神帰

幣<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>送  
幣<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>送  
幣<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>送  
幣<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>送  
幣<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>送  
幣<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>送  
幣<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>送  
幣<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>送  
幣<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>送  
幣<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>送

宇甲  
紫志  
稔研  
素郷  
再可  
道肥  
之号  
蘭徑  
英富  
秀民

去猪

達磨忌

芭蕉忌

法影講

十夜

行取哉

程子講

此令後也 甲子領馬の古紙子  
 お今得也 之官より片紙を長  
 為好子 意浄くも此老の事  
 一巻の目おする 乃中夜に  
 甲子八分中 一巻の中夜に  
 洛中へ 証もたうさす 中夜に  
 水仙も 意浄くも此老の事  
 一巻の目おする 乃中夜に  
 一尺の類 其証もたうさす 中夜に

松後 和泉  
 花屋 陸奥  
 由口 陸奥  
 十城  
 良城 紀伊  
 献哉 紀伊  
 牝十 紀伊  
 淹列 紀伊  
 夢光

冬二

誓文拂

冬三日

寝日

冬月

此令自之 誓文の法 秘人  
 冬三日 月夜の事 小通の邪  
 冬三日 月夜の事 小通の邪  
 冬三日 月夜の事 小通の邪  
 冬三日 月夜の事 小通の邪  
 冬三日 月夜の事 小通の邪  
 冬三日 月夜の事 小通の邪  
 冬三日 月夜の事 小通の邪  
 冬三日 月夜の事 小通の邪

五礎 江戸  
 斗外  
 如泊 上野  
 素彦 或后  
 几熊  
 素彦 陸奥  
 馬喬  
 古鈴  
 佐不知  
 解風

春の雨の音かきしるる冬の日  
 霞のつらさなるを思ふ月  
 月夜に思ふ人の心もさだか  
 下町に思ふ人の心もさだか  
 冬の日も思ふ人の心もさだか  
 冬の日も思ふ人の心もさだか  
 冬の日も思ふ人の心もさだか  
 冬の日も思ふ人の心もさだか  
 冬の日も思ふ人の心もさだか

折風  
 伍典  
 素研  
 成美  
 此相  
 寒口  
 霧丈  
 曉長  
 尺布  
 良婦

冬三

初時雨  
 冬雨  
 冬は月寒く喜ありけり瓦  
 響の音かきしるる冬の日  
 月夜に思ふ人の心もさだか  
 下町に思ふ人の心もさだか  
 冬の日も思ふ人の心もさだか  
 冬の日も思ふ人の心もさだか  
 冬の日も思ふ人の心もさだか  
 冬の日も思ふ人の心もさだか  
 冬の日も思ふ人の心もさだか

之忠  
 歌童  
 三祿  
 春香  
 尾洲  
 比世  
 湖月  
 密古  
 东走  
 趙危

時雨

雨の音も木々の葉も  
むらさきの葉も  
初冬に積る雪の  
まじりゆく  
初雪の  
雪の  
雪の  
雪の  
雪の

六窓  
傘  
鳥考  
芳仙  
松雀  
完在  
暁毫  
泰漢

冬四

時雨

雨の音も木々の葉も  
むらさきの葉も  
初冬に積る雪の  
まじりゆく  
初雪の  
雪の  
雪の  
雪の  
雪の

凡化  
公雄  
羅清  
去衣  
暮拾  
南尺  
子坤  
松後  
蝶夢

川音雨

松の音

初霜

多他の音ありてしるしるの如  
志の音も松の音も只見毫  
何の音も遠き松の音も小は似  
川舟の音も松の音もさく時音  
しるしるの音も松の音もさく  
松の音も松の音もさく時音  
志の音も松の音もさく時音  
志の音も松の音もさく時音  
初霜の音も松の音もさく時音

松の音

似蓉

平角

吳右

有橋

鳳毛

松の音

行充

外里

玉屑

冬五

霜

初霜の音も松の音もさく時音  
けの音も松の音もさく時音  
志の音も松の音もさく時音  
鶴の音も松の音もさく時音  
朝霜の音も松の音もさく時音  
朝霜の音も松の音もさく時音  
阿の音も松の音もさく時音  
朝霜の音も松の音もさく時音  
朝霜の音も松の音もさく時音

楓林

柴花

重鳴

化石

素兄

素釣

倭泉

泉々

十安

文莖

霜夜

朝の光もまださす  
灯の光もまださす  
柳の葉もまださす  
銀の光もまださす  
枯枝もまださす  
よるの光もまださす  
雪の光もまださす  
根の光もまださす  
くさの光もまださす  
志の光もまださす

昌杉

瓜泥

三思

月丘

立喬

群長

重厚

得波

素恒

紫境

霜柱

霜折

久六

初雪

雪の光もまださす  
雪の光もまださす  
雪の光もまださす  
雪の光もまださす  
雪の光もまださす  
雪の光もまださす  
雪の光もまださす  
雪の光もまださす  
雪の光もまださす  
雪の光もまださす

浮空

長流

白丈

不休

巨鴻

文里

鼓水

青蕪

古菜

梅珠

一斤

雪



誰人か雪のさかすかに  
 雪のさかすかに  
 灯のさかすかに  
 居る人か雪のさかすかに  
 市の中か雪のさかすかに  
 遠くか雪のさかすかに  
 九つか雪のさかすかに  
 雪のさかすかに

蝶 碎  
 敬 菴  
 仙 宗 如  
 坡 屋  
 太 溪  
 百 尾  
 五 雲  
 熊 夢  
 表 光  
 祥 純

何れも雪のさかすかに  
 朱砂も雪のさかすかに  
 けいけい雪のさかすかに  
 跡の雪のさかすかに  
 ついで雪のさかすかに  
 雲の雪のさかすかに  
 葉の雪のさかすかに  
 雲の雪のさかすかに  
 大雪も雪のさかすかに  
 氷の雪のさかすかに

南 尺  
 紀 子  
 雲 如  
 苔 里  
 竹 風  
 塘 里  
 嶺 山  
 知 白  
 雲 歩  
 一 徹  
 素 心

雪見

雪見の雪もあはれなる人ぞ  
小坊の雪もあはれなる人ぞ  
掃雪の雪もあはれなる人ぞ  
不雪の雪もあはれなる人ぞ  
雪の雪もあはれなる人ぞ  
雪の雪もあはれなる人ぞ  
雪の雪もあはれなる人ぞ  
雪の雪もあはれなる人ぞ

如治

古菜

徳島

頂雪

雪牛

友人

聖涼

雨人

極白

優水

雪圍

雪磔

雪佛

冬八

雪兔

雪女

雪智

雪智の雪もあはれなる人ぞ  
雪女の雪もあはれなる人ぞ  
雪兔の雪もあはれなる人ぞ  
雪智の雪もあはれなる人ぞ  
雪女の雪もあはれなる人ぞ  
雪兔の雪もあはれなる人ぞ  
雪智の雪もあはれなる人ぞ  
雪女の雪もあはれなる人ぞ

吉茂

雪氏

雪白

波臨

土鈴

青々

雪牛

雪文

徐来

踏紅

霰

雪杖のしりしりたる音は  
夕方の松のしりしりたる音  
川のしりしりたる音は  
霧のしりしりたる音は  
雪のしりしりたる音は  
氷のしりしりたる音は  
霜のしりしりたる音は  
露のしりしりたる音は

五傳

金鷲

翠兒

榊木

其正

惟鶴

弄鶴

可不

葉五

东儿

霰

雪竿

冬元

雪船

そのしりしりたる音は  
雪のしりしりたる音は  
氷のしりしりたる音は  
霜のしりしりたる音は  
露のしりしりたる音は  
霧のしりしりたる音は  
雪のしりしりたる音は  
氷のしりしりたる音は  
霜のしりしりたる音は  
露のしりしりたる音は

雁凡

画舟

知在

幽管

東明

林子

素兒

雪霰

梅居

松笠

初氷

樹

雪船

氷

氷のつらさ 氷の白さ 氷の清さ 氷の脆さ 氷の滑り 氷の割れ 氷の融け 氷の凍り 氷の結露 氷の霜降

後注

突市

後注

田旭

後注

大島

後注

右井

後注

若海

後注

柙雨

後注

杖老

後注

萱水

後注

宇林

後注

舞若

凍

冬十

氷柱

積凍

鐘氷

冬山

凍つては木枯る 氷のつらさ 氷の白さ 氷の清さ 氷の脆さ 氷の滑り 氷の割れ 氷の融け 氷の凍り 氷の結露 氷の霜降

五雲

奴宮

月居

收芋

乙二

古江

標菱

菜凡

花嶋

文里

冬野

此の冬野の程言ふ冬野の

潭月

庵の冬野の程言ふ冬野の

氏古

世の程言ふ冬野の

君山

人の程言ふ冬野の

雪居

くつ程言ふ冬野の

睡花

庵の程言ふ冬野の

里桂

朽の程言ふ冬野の

里桂

一面の程言ふ冬野の

七岫

自の程言ふ冬野の

仙李

入自の程言ふ冬野の

五波

又二十一

朽野

枯野

枯野

木野

かれらも冬野の程言ふ冬野の

菓名

あり海の程言ふ冬野の

雨銘

船の程言ふ冬野の

雪野

自の程言ふ冬野の

麦字

水野の程言ふ冬野の

雪野

この程言ふ冬野の

東野

野の程言ふ冬野の

雪野

自の程言ふ冬野の

谷野

何の程言ふ冬野の

無赫

馬の程言ふ冬野の

魚坊

木野

木野

冬川

牛長の女... 石段... 冬川... 枯竹... 流石... 冬川... 阿誰

百尾 昌彦 可翁 我百 珠美 鼓正 一古 外央 五来 阿誰

冬十二

水個

冬構

北窓閉

雪垣

雪垣... 北窓閉... 冬構... 雪垣... 北窓閉... 冬構... 雪垣... 北窓閉... 冬構...

其始 可也 届位 伎七 波臨 柳絮 聖陽 志功 竹風 唇風

叢卷

冬籠

由き場也ふりかへりて日暮や  
山深き山にふりかへりて日暮や  
秋風吹く木の下に  
やまきりて日暮や  
此巻て風のすまじり  
雪の吹く山の下に  
冬籠

葉之  
呂兵  
塘里  
鏡水  
呂島  
峯白  
如毛  
狐崇  
醒風  
風述

冬十三

茶口切

油入の地もさちちも冬籠  
葉の吹く山の下に  
福寿の吹く山の下に  
善徳の吹く山の下に  
冬籠  
やまきりて日暮や  
山深き山にふりかへりて日暮や  
秋風吹く木の下に  
やまきりて日暮や  
此巻て風のすまじり  
雪の吹く山の下に  
冬籠

標陰  
路風  
兼谷  
呉竺  
北雅  
只言  
冬里  
龍山  
鷺白  
風足

爐用

火燧

火桶

炉用之木乃栲樹之根也  
爐用之木乃栲樹之根也  
爐用之木乃栲樹之根也  
爐用之木乃栲樹之根也  
爐用之木乃栲樹之根也  
爐用之木乃栲樹之根也  
爐用之木乃栲樹之根也  
爐用之木乃栲樹之根也  
爐用之木乃栲樹之根也  
爐用之木乃栲樹之根也

楚山 綵爰 百維 無淨 東几 衣布 五角 木原 綵破 鏡雙

冬十四

火鉢

火盆

埋火

火鉢之形也  
火盆之形也  
埋火之形也  
埋火之形也  
埋火之形也  
埋火之形也  
埋火之形也  
埋火之形也  
埋火之形也  
埋火之形也

輪々 二柳 尺布 百尾 槐立 千舟 碟夢 烈秀 人左 吉免





炭賣

十一年の暮の炭賣り

周民

会

明の晴久の会

指馬

蒲團

あつたの蒲團

李郊

紙衣

紙衣の人の紙衣

教枝

冬十六

頭巾

頭巾の人の頭巾

其白

綿帽子

綿帽子の人の綿帽子

道肥

足袋

足袋の人の足袋

漆浪

湯

寒

たまたまの湯のさしつかへなく  
湯の熱いさうなれば湯の熱い  
有明の湯のさしつかへなく  
湯の熱いさうなれば湯の熱い  
湯の熱いさうなれば湯の熱い  
湯の熱いさうなれば湯の熱い  
湯の熱いさうなれば湯の熱い  
湯の熱いさうなれば湯の熱い  
湯の熱いさうなれば湯の熱い  
湯の熱いさうなれば湯の熱い

飯真  
慎車  
見二  
暮白  
仙露  
梧扇  
魁初

冬十七

水決

凍瘡

木決

靴

つるつるしたまの湯のさしつかへなく  
湯の熱いさうなれば湯の熱い  
湯の熱いさうなれば湯の熱い  
湯の熱いさうなれば湯の熱い  
湯の熱いさうなれば湯の熱い  
湯の熱いさうなれば湯の熱い  
湯の熱いさうなれば湯の熱い  
湯の熱いさうなれば湯の熱い  
湯の熱いさうなれば湯の熱い  
湯の熱いさうなれば湯の熱い

賣書  
泰漢  
妻光  
貝采  
黃婦  
山葉  
百川  
雨橋  
此得

聯

木枯風

賦也 朝多事り 暮子 松う是  
 賦也 也 へい ちの 可 建 の いと  
 孫 じ ちの 天 鶴 ちの あり 下 仕 女  
 木 ち ちの じ ちの 暮 暮 入 日 ち  
 こ ち ちの ち ちの 暮 暮 入 日 ち  
 木 枯 風 ち ちの 暮 暮 入 日 ち  
 風 ち ちの 暮 暮 入 日 ち  
 賦 也 ち ちの 暮 暮 入 日 ち  
 木 枯 也 ち ちの 暮 暮 入 日 ち

李朝

孫

路人

唐國

東羊

羽人

玉色

周江

青燕

里枝

冬二十八

木 枯 風 ち ちの 暮 暮 入 日 ち  
 風 ち ちの 暮 暮 入 日 ち  
 賦 也 ち ちの 暮 暮 入 日 ち  
 木 枯 也 ち ちの 暮 暮 入 日 ち  
 木 枯 風 ち ちの 暮 暮 入 日 ち  
 木 枯 風 ち ちの 暮 暮 入 日 ち  
 風 ち ちの 暮 暮 入 日 ち  
 風 也 馬 ち ちの 暮 暮 入 日 ち  
 木 枯 風 ち ちの 暮 暮 入 日 ち

飛川

脱負

慈臥

意厚

羅風

猿愛

戸幽

知水

麦亨

止令

落葉

定ぬる葉ももろき葉ももろき  
実りたる葉ももろき葉ももろき  
果ももろき葉ももろき葉ももろき  
吹く風ももろき葉ももろき  
吹く風ももろき葉ももろき  
吹く風ももろき葉ももろき  
吹く風ももろき葉ももろき  
吹く風ももろき葉ももろき  
吹く風ももろき葉ももろき

文海  
為交  
只有  
花鳥  
園南  
鴉  
塘  
秋葉  
芝月  
雪水

冬十九

木葉

木葉ももろき葉ももろき  
木葉ももろき葉ももろき  
木葉ももろき葉ももろき  
木葉ももろき葉ももろき  
木葉ももろき葉ももろき  
木葉ももろき葉ももろき  
木葉ももろき葉ももろき  
木葉ももろき葉ももろき  
木葉ももろき葉ももろき  
木葉ももろき葉ももろき

文詠  
銀羽  
眉山  
春南  
由葉  
梅齋  
雅禱  
素外  
秋毛

散紅葉

朽葉

名歌

冬枯

冬枯也 樹のこも 吹られ 屋敷  
冬枯也 木々の 葉は 落ちて  
冬枯也 空は 高く 遠く  
冬枯也 中より 遠く 雁の  
冬枯也 砂漠の 心は 静か  
冬枯也 遠く あり 木々の  
冬枯也 空は 高く 遠く  
冬枯也 木々の 葉は 落ちて  
冬枯也 空は 高く 遠く  
冬枯也 木々の 葉は 落ちて

大島 其里 飛川 折風 抱岸 空原 呂持 石牙 荻妻 坐索知

冬木立

冬廿

枯柳

枯柳也 河の 水は 静か  
枯柳也 木々の 葉は 落ちて  
枯柳也 空は 高く 遠く  
枯柳也 中より 遠く 雁の  
枯柳也 砂漠の 心は 静か  
枯柳也 遠く あり 木々の  
枯柳也 空は 高く 遠く  
枯柳也 木々の 葉は 落ちて  
枯柳也 空は 高く 遠く  
枯柳也 木々の 葉は 落ちて

魯白 旧山 渭川 谷水 泰里 峯二 鷗沙 竹調 友志 阿涼

枯櫻

枯蓮

枯萩

枯萩

為葉のむくし叶のさくら種  
行のまほも文木の橋か  
と葉枯る葉のまきま行の  
枯葉の月のまきま葉の種  
のまきま入るまきまの葉  
枯るまきまのまきまの葉  
萩のまきまのまきまの葉  
萩のまきまのまきまの葉  
風のまきまのまきまの葉

真実 陶 李山 杜由 秀曉 警春 比世 湖房 荻海 戸出

文之廿一

枯菊

枯女部

枯菊

枯草

枯葉のまきまのまきまの葉  
のまきまのまきまの葉  
十のまきまのまきまの葉  
まきまのまきまのまきまの葉  
枯葉のまきまのまきまの葉  
枯葉のまきまのまきまの葉  
枯葉のまきまのまきまの葉  
枯葉のまきまのまきまの葉  
枯葉のまきまのまきまの葉  
枯葉のまきまのまきまの葉

雨緒 五来 望音 佳美 乙介 秋也 佳美 蘭圃 古巢 志柳

かみきりかきりかきりかきりかきりかきり

冬廿二  
下種  
菅白

枯草の積りていへば草の聲

冬廿二  
下種  
挑岸

枯草

枯草の積りていへば草の聲

冬廿二  
下種  
有羞

枯草

枯草の積りていへば草の聲

冬廿二  
下種  
刺路

枯草の積りていへば草の聲

冬廿二  
下種  
晋吉

枯草

枯草の積りていへば草の聲

冬廿二  
下種  
無一

枯草

枯草の積りていへば草の聲

冬廿二  
下種  
丹波 風後

枯草

枯草の積りていへば草の聲

冬廿二  
下種  
湖萍

枯草

枯草の積りていへば草の聲

冬廿二  
下種  
可帯

枯草

枯草の積りていへば草の聲

冬廿二  
下種  
尾比 宣長

冬廿二

梅花

梅花の積りていへば草の聲

冬廿二  
下種  
千種

梅花の積りていへば草の聲

冬廿二  
下種  
佳梅

梅花の積りていへば草の聲

冬廿二  
下種  
竹風

梅花の積りていへば草の聲

冬廿二  
下種  
龜鏡

梅花の積りていへば草の聲

冬廿二  
下種  
擔里

梅花の積りていへば草の聲

冬廿二  
下種  
雪圃

梅花の積りていへば草の聲

冬廿二  
下種  
魚翠

梅花の積りていへば草の聲

冬廿二  
下種  
野橋

梅花の積りていへば草の聲

冬廿二  
下種  
綺石

梅花の積りていへば草の聲

冬廿二  
下種  
梧泉



忘花

むらさき花のさきさきとありて  
梅の枝のさきさきとありて  
あけぼのさきさきとありて  
かしのさきさきとありて  
さくらさきさきとありて  
さくらさきさきとありて  
さくらさきさきとありて  
さくらさきさきとありて

冬后 馬尾

周防 馬尾

下段 芦舟

下段 佛仙

下段 南等

下段 祇東

下段 九鼻

冬廿三

山茶花

水仙花

山茶花のさきさきとありて  
水仙花のさきさきとありて  
水仙花のさきさきとありて  
水仙花のさきさきとありて  
水仙花のさきさきとありて  
水仙花のさきさきとありて  
水仙花のさきさきとありて  
水仙花のさきさきとありて

羽子

加賀 流魚

お持 通肥

お持 古道

お持 普石

お持 探梅

お持 長水

お持 文海

お持 巴明

枇杷花

冬牡丹  
茶花  
枇杷花  
冬牡丹  
茶花  
枇杷花

丹后 桐平

出づ 一路

如才 和水

三枝 非倫

吳琴 珠研

真情 所凡

如流 卷面

冬牡丹

茶花

枇杷花

冬廿四

大莖花

大莖花  
公年花  
錦木  
室梅

以文

跨山

善翁

瓜坊

茶城

慶平

曾氏

相古

菊文

臨嘉

藺植

大根

蕪

胡蘿蔔

蕎麥刈

麥蒔

くく藺やまの國中に生るる

の枝や田の邊に生るる人のけ

しのきも大根も蕎麥も此れ較

信よりきり風情も大に引

れんきり生るる所かある所

ありんきり生るる所かある所

申風やまの國中に生るる

くのきり生るる所かある所

株よりきり生るる所かある所

蕎麥刈やまの國中に生るる

丹波

小川

布重

紀伊

茶煙

五橋

芋海

紀伊

薄橋

甚十

里畷

甚十

冬廿五

于菜

荳菜

網代

まのきり生るる所かある所

まのきり生るる所かある所

人のきり生るる所かある所

まのきり生るる所かある所

まのきり生るる所かある所

まのきり生るる所かある所

まのきり生るる所かある所

まのきり生るる所かある所

まのきり生るる所かある所

まのきり生るる所かある所

甚十

故栖

揚花

杉村

石久

懐花

南窓

信華

其網

上野

冬水

一峯

玉本

魚坊

一扇  
 桃五  
 竹亭  
 喜尼  
 松舍  
 盤凡  
 得皮  
 鳴泉

冬廿六

柴漬  
 竹苟  
 鱸  
 生海蘆

松洞  
 鷗沙  
 干當  
 吾舍  
 草鳥  
 魚候  
 仙風  
 子皋  
 南南  
 古橋

河原

太田 大塚 小塚 小島

細川... 一... 堀... 山... 室... 通... 維... 平...

信玄 五來 希双 自後 李山 如松 意國 巴令 九和 乙坡

冬廿七

千鳥

錦... 有... 月... 山... 橋... 山... 打... 川... 小...

門器 百舟 吟耕 梅雅 薄亭 李雲 素牛 琴雷



水鳥

鷓鴣

水鳥の鳴き声は秋の聲  
さびしき心持をよそ  
みづかき水鳥の鳴き声  
はるかなる心持をよそ  
水鳥の鳴き声は秋の聲  
さびしき心持をよそ  
水鳥の鳴き声は秋の聲  
さびしき心持をよそ  
水鳥の鳴き声は秋の聲  
さびしき心持をよそ

秋水  
當車  
吐詠  
丁友  
山君  
官里  
朽鳥  
作茶  
一幹

冬九九

木兔

鷓鴣

木兔の鳴き声は秋の聲  
さびしき心持をよそ  
鷓鴣の鳴き声は秋の聲  
さびしき心持をよそ  
木兔の鳴き声は秋の聲  
さびしき心持をよそ  
鷓鴣の鳴き声は秋の聲  
さびしき心持をよそ  
木兔の鳴き声は秋の聲  
さびしき心持をよそ  
鷓鴣の鳴き声は秋の聲  
さびしき心持をよそ

丁考  
作茶  
花翎  
妻宇  
梅甜  
巴陵  
輕舟  
兼百  
宗讀

鶯子

鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子

鶯子

鶯子

鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子

鶯子

鶯子

鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子

鶯子

鶯子

鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子

鶯子

鶯子

鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子

鶯子

鶯子

鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子

鶯子

鶯子

鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子

鶯子

鶯子

鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子

鶯子

鶯子

鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子

鶯子

鶯子

鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子 鶯子

鶯子

冬三十一

芥燒

芥燒 芥燒 芥燒 芥燒 芥燒 芥燒 芥燒 芥燒 芥燒 芥燒

芥燒

十一月

霜月

霜月 霜月 霜月 霜月 霜月 霜月 霜月 霜月 霜月 霜月

霜月

冬至

冬至 冬至 冬至 冬至 冬至 冬至 冬至 冬至 冬至 冬至

冬至

曆賣

曆賣 曆賣 曆賣 曆賣 曆賣 曆賣 曆賣 曆賣 曆賣 曆賣

曆賣

髮置

髮置 髮置 髮置 髮置 髮置 髮置 髮置 髮置 髮置 髮置

髮置



袴着 信 袴着 信  
 被初 上 被初 上  
 新嘗會 信 新嘗會 信  
 御神樂 大和 御神樂 大和  
 里神樂 信 里神樂 信

大燒 信 大燒 信  
 吹草祭 信 吹草祭 信  
 子祭 和泉 子祭 和泉  
 子燈心 信 子燈心 信  
 空也念 信 空也念 信

冬三二

鉢鼓

鉢鼓の音は位下しくも響く踊る那  
方中は心の最も響く鉢鼓  
心も響くや心も響く鉢鼓  
心も響くや心も響く鉢鼓  
人の世は心も響く鉢鼓  
心も響くや心も響く鉢鼓  
心も響くや心も響く鉢鼓  
心も響くや心も響く鉢鼓

故中  
蘭臺

藤菱

密古

青々

雷走

菴祐

涌山

楊花

杜門

己百

大師講

大師講の音は位下しくも響く踊る那  
方中は心の最も響く大師講  
心も響くや心も響く大師講  
心も響くや心も響く大師講  
人の世は心も響く大師講  
心も響くや心も響く大師講  
心も響くや心も響く大師講  
心も響くや心も響く大師講

冬三三

己百

杜門

顔見世

顔見世の音は位下しくも響く踊る那  
方中は心の最も響く顔見世  
心も響くや心も響く顔見世  
心も響くや心も響く顔見世  
人の世は心も響く顔見世  
心も響くや心も響く顔見世  
心も響くや心も響く顔見世  
心も響くや心も響く顔見世

梅人

紫文

踏鳥

杏梅

春志

雨晴

雲翹

子楓

紫文

錦水

太山橋

種花

太山橋の音は位下しくも響く踊る那  
方中は心の最も響く太山橋  
心も響くや心も響く太山橋  
心も響くや心も響く太山橋  
人の世は心も響く太山橋  
心も響くや心も響く太山橋  
心も響くや心も響く太山橋  
心も響くや心も響く太山橋

柘菴

柘の花を色をうすく煮て

煎五

葱

葱を切つて白く煮て

友雲

六比蘇

蘇を煮て白く煮て

友雲

雪海苔

雪海苔を煮て白く煮て

斗流

初海苔

初海苔を煮て白く煮て

雨申

鰯

鰯を煮て白く煮て

紫雲

鰯

鰯を煮て白く煮て

晋估

冬三三

鯨

鯨を煮て白く煮て

素五

牡蛎

牡蛎を煮て白く煮て

支百

鰻鱺

鰻鱺を煮て白く煮て

紫雲

杜文魚

杜文魚を煮て白く煮て

紫雲

乾麩

乾麩を煮て白く煮て

儿薑

乾麩

乾麩を煮て白く煮て

芋水

乾麩

乾麩を煮て白く煮て

古声

乾麩

乾麩を煮て白く煮て

兼男

乾麩

乾麩を煮て白く煮て

木朶

乾麩

乾麩を煮て白く煮て

仙露

雞訂酒  
生薑酒  
霰酒  
蒼香湯  
獵

人...  
垣...  
飯...  
菜...  
五...  
志...  
破...  
う...  
雲...  
吾...

朝秋  
貝朱  
睡喜  
繪橋  
羽毛  
氣悠  
三路  
丘高  
里秋  
麦熟

冬三四

夜具引

鷹狩

よ...  
な...  
常...  
獲...  
狩...  
雪...  
夕...  
夕...  
夕...  
夕...

右収  
慈愛  
瓦全  
花縣  
莖史  
跨山  
鳴風  
佳志  
只言  
意字

鳥呼 葎馬 刀草 落岬 教学

葎馬 鳥呼 刀草 落岬 教学  
 葎馬 鳥呼 刀草 落岬 教学  
 葎馬 鳥呼 刀草 落岬 教学  
 葎馬 鳥呼 刀草 落岬 教学  
 葎馬 鳥呼 刀草 落岬 教学

葎馬 鳥呼 刀草 落岬 教学

卷三五

十二月

師走 子習 臘八 佛名會

師走 子習 臘八 佛名會  
 師走 子習 臘八 佛名會  
 師走 子習 臘八 佛名會  
 師走 子習 臘八 佛名會  
 師走 子習 臘八 佛名會

師走 子習 臘八 佛名會

寒雨 寒肉 寒入 事始

冬の日は行ふ事れば佛入り名  
御目よれ比徹の海内信あり  
の事始今まらるる事始  
家に解るる事始  
物言し事入る事始  
事入る事始  
紙の事始  
武事事始  
事始  
事始

東樹  
自至  
巴川  
如法  
末 道紀  
晋来  
上 其環  
之泉  
榮陸  
一軒

冬三六

寒月

寒月の事始  
寒月の事始  
寒月の事始  
寒月の事始  
寒月の事始  
寒月の事始  
寒月の事始  
寒月の事始  
寒月の事始  
寒月の事始  
寒月の事始

馬蹄  
千影  
俊祐  
俊貞  
素雄  
金備  
梨風  
馬蹄  
草舟  
馬蹄

寒月

寒声

戸のしずかきしるしに  
隙のしずかきしるしに  
葉のしずかきしるしに  
雪のしずかきしるしに  
氷のしずかきしるしに  
霧のしずかきしるしに  
露のしずかきしるしに  
霜のしずかきしるしに  
雪のしずかきしるしに  
氷のしずかきしるしに

暮の  
芝秀  
早涼  
其友  
燕士  
睡善  
枝老  
程方  
松窓

冬三七

寒塘雜

氷のしずかきしるしに  
雪のしずかきしるしに  
霧のしずかきしるしに  
露のしずかきしるしに  
霜のしずかきしるしに  
雪のしずかきしるしに  
氷のしずかきしるしに  
霧のしずかきしるしに  
露のしずかきしるしに  
霜のしずかきしるしに

牛馬  
無淨  
南枝  
鐵砵  
尺艾  
自珍  
蒼杉  
木東  
桃李  
梅珠

寒曝

雪のしずかきしるしに  
氷のしずかきしるしに  
霧のしずかきしるしに  
露のしずかきしるしに  
霜のしずかきしるしに  
雪のしずかきしるしに  
氷のしずかきしるしに  
霧のしずかきしるしに  
露のしずかきしるしに  
霜のしずかきしるしに

梅珠

寒造

くささきや海峯も霜の

ほろ 昔夜

寒水

白くも花の影は遠くはる

ほろ 山吏

寒紅粉

刀懸く梅の影もくささ

成后 呂情

寒椿

唇よりしめし紅もさし

紀子 誰姿

寒梅

うん梅もちりし細少

紀子 周の 宇甲 千子 秋瓜

二二八

寒の梅

うん梅もちりし細少

浪子 和友 山城 吳野 雲帯 杜口

早梅

早梅もちりし細少

伊勢 花の

冬梅

冬梅もちりし細少

洞曼

臘梅

臘梅もちりし細少

伊勢 桃門

雞乳

雞乳もちりし細少

芦水



鶺鴒  
 多貴  
 札納  
 衣配  
 節分  
 年越

かきつゝの葉や梅のつゝも  
 送加の院の年を過すは  
 徳重のつゝも札のつゝも  
 方除のつゝも札のつゝも  
 ありぬるのつゝも梅のつゝも  
 花とぬるのつゝも梅のつゝも  
 そまのつゝも梅のつゝも  
 長らくのつゝも梅のつゝも  
 つゝも梅のつゝも梅のつゝも  
 けしきつゝも梅のつゝも

周防 安之  
 其中  
 相阿  
 效枝  
 茶者  
 下也 文碑  
 尼 古友  
 後山  
 朱三  
 後水  
 冬三九

夏打  
 鵜飼刺  
 柘刺  
 厄拂  
 夏舟

うつゝも梅のつゝも  
 うつゝも梅のつゝも  
 うつゝも梅のつゝも  
 うつゝも梅のつゝも  
 うつゝも梅のつゝも  
 うつゝも梅のつゝも  
 うつゝも梅のつゝも  
 うつゝも梅のつゝも  
 うつゝも梅のつゝも  
 うつゝも梅のつゝも

柘柵  
 万鈴  
 鼎左  
 鯨山  
 柘秋  
 仙宗  
 貝糸  
 丁水  
 幸日  
 其席

年の夏は...  
 梅の香...  
 雨...  
 水...  
 風...  
 古...  
 素...  
 石...  
 梅...

冬四十

夏祝

冬内書

梅...  
 玉...  
 五...  
 井...  
 南...  
 健...  
 龍...  
 松...

岡見

煤拂



年木

あまのりてはるのよはしきまのりて

秋毛

下は

平如流

あまのりてはるのよはしきまのりて

梅右

瘧疾

子孫候

あまのりてはるのよはしきまのりて

きり

琴理

あまのりてはるのよはしきまのりて

馬瓢

あまのりてはるのよはしきまのりて

里秋

あまのりてはるのよはしきまのりて

推五

姥等

あまのりてはるのよはしきまのりて

吉乃

あまのりてはるのよはしきまのりて

紫雲

吉市

あまのりてはるのよはしきまのりて

普白

冬四二

〔本〕

あまのりてはるのよはしきまのりて

坐忘

〔本〕

あまのりてはるのよはしきまのりて

半座

随和

〔本〕

あまのりてはるのよはしきまのりて

旭布

〔本〕

あまのりてはるのよはしきまのりて

巴川

あまのりてはるのよはしきまのりて

其西

〔本〕

あまのりてはるのよはしきまのりて

洞夏

あまのりてはるのよはしきまのりて

如水

〔本〕

あまのりてはるのよはしきまのりて

蝶夢

あまのりてはるのよはしきまのりて

力雲

〔本〕

あまのりてはるのよはしきまのりて

信水

糸巾

松賣	葉竹賣	穗長賣	羽子板賣	星佛賣	口本立
牛の... ... ...	山鳥の... ... ...	... ... ...	羽子... ... ...	... ... ...	...
松十	和十	葉之	文車	梢舟	有東

冬四ノ三

古曆	古忘
... ... ...	... ... ...
都雀	已明

歳暮

暮のしづかに静かに暮るる年を  
 ことごとく悔ひのちのち  
 横をくはるる年を  
 ことごとく悔ひのちのち  
 物も人も心も  
 ことごとく悔ひのちのち  
 年をくはるる年を  
 ことごとく悔ひのちのち  
 歳をくはるる年を  
 ことごとく悔ひのちのち

月溪  
 百韻  
 泰里  
 瓦合  
 比菜和  
 中桂  
 延史  
 九阜  
 杜音  
 冬季

冬四回

竹年

竹の若隣りも竹の若  
 根の事も竹の若  
 根の事も竹の若  
 根の事も竹の若  
 根の事も竹の若  
 根の事も竹の若  
 根の事も竹の若  
 根の事も竹の若  
 根の事も竹の若  
 根の事も竹の若

蜂群  
 字漱  
 坡尾  
 徳系  
 乙牙  
 菁莪  
 瓜あ  
 二種  
 花舟  
 雨静

惜歳

春待

春近

小晦日

惜く年を以て灯をもちけり  
行かぬも昔の思ふ来り隣の子  
今も来ぬも昔の思ふ来り  
さあけぬも昔の思ふ来り  
さあけぬも昔の思ふ来り  
さあけぬも昔の思ふ来り  
さあけぬも昔の思ふ来り  
さあけぬも昔の思ふ来り

女 曾和  
度秋  
彦中  
梅月  
不老  
幽谷  
一仙  
蝶菱  
如洋

冬四五

大晦日

除夜

年夜

大晦日

悠々たる年を以てけり  
灯をもちけり  
一と年の思ふ来り  
さあけぬも昔の思ふ来り  
さあけぬも昔の思ふ来り  
さあけぬも昔の思ふ来り  
さあけぬも昔の思ふ来り  
さあけぬも昔の思ふ来り

丹人  
鶴亮  
小花  
巴才  
英治  
彦中  
彦中  
百尾  
如洋

年籠

大なるものなりて、昔よりかゝる人立

芳水

補給する事なる人の、安部那

魚洲

寸さく、槍の匂い、さく、毫

古謙

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

冬四六終



